



<連載75>

「船の本」執筆記



大阪府立大学海洋システム工学科助教授

池田 良穂

昨年から 今年にかけて、船の本の執筆依頼が続けて舞いこんだ。商業ベースにはのらないような趣味の船の本の自費出版を続けている筆者にとってこんなに嬉しいことはない。船キチの人々に対する本だけでなく、世間一般の人々に船や海のことを知ってもらう一般書がどんどん出なければ、船の好きな人も育たないし、船の専門家の地道な努力が一般に受け入れられるようにはならないからである。「誰も海運や造船の重要さを認識していない」と、いくら憤慨してみてもしかたがない。多くの人々に知ってもらう努力をしなければ、広く認められるようにはなりえない。

海事広報協会というややいかめしい名前の団体が、古くからこうした分野で努力しているが、我々のように船の好きな人や、船で飯を喰っている人々も、もっと世間一般に親しみやすく船や海のことを知ってもらう努力が大切なのだと思う。これには一般書の出版は大変効果的な手段と言える。

さて、今年最初に出版したのが「静かな海と楽しい航海」という本。筆者の現代クルーズへの思いを込めた一冊である。出版社は朔北社という会社で、同社の一般書出版の第一冊目に選ばれ



た。「船の本はあまりもうかりませんよ」という筆者の忠告に耳も貸さずに、筆者を説得し、叱咤激励してわずか3ヶ月ほどで書き上げさせられた。本の題名は、同社の社長のアイデアでゲーテ

の言葉からとったものとなった。文学的な素養のあまりない筆者の文章にとってはやや荷の重い表題ではあるが、本が出来上がってみるとなかなか似合っているのが不思議である。

世界のクルーズ事情、現代クルーズの歴史、クルーズの楽しみ方などとともに、筆者がこれまで体験してきた船旅の中から15航海を厳選して紹介した航海記も載せた。そういう意味では筆者の客船への関わりの今までの総決算であり、新しい再出発の記念となる出版となった。発売は星雲社で、一般書店で扱っているので、ぜひ機会を見つけてご笑読賜われれば幸甚である。

第二冊目は、船の科学本で、科学啓蒙書として有名な講談社のブルーボックスの一冊の執筆依頼。できるだけ新しい船の科学技術を取り入れて、船の技術の解説をしてほしいというのが、編集者の希望であった。こちらは、内容的には大学で教えていることをベースにしたものだから、比較的簡単と思って引き受けたものの、ついつい内容が固く高度なものになりがちで、編集者の眼鏡にはなかなかかなわない。

「文化教室でまったくの船の素人に話すつもりで書いて下さい」と言われるものの、少しでも記述に正確さを要求するとついつい難しい表現、専門用語、数式を多用した説明がでてきてしまう。これを易しくかつ正確に書くのがいかに大変かを実感させられた。この原稿は5ヶ月で完成して、2月末に脱稿し、現在編集作業が続行中。今年9月には発行の予定である。

最後の3冊目は海事広報協会が企画する「交通ボックス」の一冊。この「交通ボックス」は交通関係の啓蒙書100冊をシリーズとして出すという規模の大きい出版プロジェクトである。出版は海事書の出版ではもっとも積極的な姿勢を示す成山堂書店があたる。筆者が頼まれたのは、「内航

客船とカーフェリー」というもので、全国の内航客船について分かりやすく解説した本であった。どちらかというとな筆者の得意とする分野であるが、最初に書き始めて70%くらいは書いた後、なかなか筆が進まず、ずるずるとするうちに頼まれてから2年近くがいつの間にか過ぎてしまった。その原因のひとつが、やはり最近の内航客船、特に離島航路の船にあまり頻繁には乗っていないということであった。やはり、実際に船と会い、乗ってみなければなかなか臨場感が沸いてこない。

日本の離島航路を網羅的に乗り歩いたのは、学生時代だから、もう20年近くも前のこととなる。その後は、時間をみつけては長距離カーフェリー、クルーズ客船、そして離島航路客船に乗るようにしているものの、なかなか学生時代のように内航客船に乗るだけに時間を使えない。したがって、20年前の記憶をたどりながら、最近のデータを調査しての執筆になるが、どうしても想像力が追いつかず、筆は進まないということとなる。こうした事情があったものの、この本の原稿もなんとか書き上げて5月末には出版社に渡した。この本の中には、本誌でもお馴染みの岩瀬玄海さんにイラストを何枚かお願いしている。本年中には書店に並ぶことになる予定なのでご期待頂きたい。

7月20日「海の記念日」を
国民の祝日にしましょう